

## 〔雪村と水墨画展によせて〕

## 芋銭と雪村

雪村の画に魅せられた人として、近世の茶人では小堀遠州、豫楽院・近衛家熙、画家では狩野山雪、尾形光琳、酒井抱一、近代の画家では橋本雅邦、狩野芳崖、横山大観などの巨匠をあげることができます。中でも光琳は雪村の画をさかんに模写し、自らの絵画制作の栄養源としました。

さて、明治から昭和にかけて活躍した茨城県稲敷郡牛久村(町)の文人画家、芋銭・小川茂吉(明治元年、江戸赤坂の牛久藩邸で生まれ、昭和13年、牛久の自宅で没した。享年71)も、雪村の画に魅せられた一人です。

芋銭は、牛久沼の風物や伝説を主に水墨によって幻想的に描いたことで知られています。彼は牛久沼の主(精霊)として人々に愛された河童(カッパ)をさかんに描きました。それで、人は彼のことを「河童の画家」と呼びました。

芋銭は画家として同じ常陸(茨城県)出身の戦国時代の水墨画家、雪村に親しみを感じました。あるとき、彼は雪村の遺作をもとめて雪村ゆかりの地、常陸太田へ探索の旅に出かけました。そのことは芋銭の画文集『草汁漫画』(明治41年、日高有倫堂刊)の「冬の部」に「常

陸太田にて 雪村の柳も蘆も枯る、宿」という自作の俳句を載せていることから推測されます。

芋銭は常陸太田の宿で、冬枯れて葉をすっかり落とした枝垂れ柳の樹と水辺で茎が折れ、立ち枯れた蘆の光景を目にして、雪村が好んで描いた「枯柳図」「枯蘆図」のイメージを重ねました。この芋銭の俳句はそのときの感慨を詠んだものであります。この冬枯れの蕭々とした光景が雪村探索に疲れた芋銭の心をやさしく慰めたにちがいません。

ところで、芋銭の感性と美意識を識る上で「枯れ草と落葉の音楽」と題する小エッセイ(『中央公論』昭和12年1月号初出、『芋銭子文翰全集一上巻一』収所、中央公論社、昭和41年)は重要です。詩のような美しい文章であり、全文をここで紹介しておきます。

「枯草と落葉の崖を訪れるのを朝の日課にして居る。此日課は多く冬至前後である。崖は赤松の立ち並んである岡である。実に清浄美の象徴は枯草と落葉である。栗植桐柿などの落葉や尾花龍膽刈萱女郎花其他の枯草の中の名を知らぬ草のくるくると葉を巻き上げた

る姿をとりわけ悦ぶ。静かな岡は落葉と枯草との間の音楽をさへ感ずる。落葉の色の美しさは蒼空の中から降る如き戸隠山の落葉である。帰り路に掘って囃んだ踏(フキ)の藁(トウ)の仙味は今に忘れぬ。」(正字の漢字を新字に改めた<林>)

芋銭は冬至(陰暦十一月、陽暦十二月)のころ、散歩の路で目にした枯草と落葉の清浄な美しさに感銘しました。「枯草の中の名を知らぬ草のくるくると葉を巻き上げたる姿」に視線を注ぐ人はめずらしい。芋銭の目は、その裡に何を見ていたのでしょうか。

さて、いまから十年ほど前に芋銭の孫にあたる美術史家で畏友の小川知二氏(当時茨城県立歴史館学芸員、現在東京学芸大学教授)より、水戸在住の実業家(煙草仲買商など)で芋銭の後援者である兩人・杉田恭助(『草汁漫画』の出版を援助した人)に宛てた芋銭の毛筆書簡一通(大正3年4月26日付)をいただきました。私は、小川さんが企画した茨城県立歴史館の特別展『雪村―常陸からの出発―』(1992年10月3～11月13日)の準備をお手伝いしました。この書簡はそのお礼のしるしということで贈られたものです。元の封筒に収められた芋銭の書簡は、後日、京都の表具師・黒澤糊田荘の手で文人好みの落ち着いた掛軸装に表具されました(紙本墨書、18.6×78.2cm、図1)。この書簡は『芋銭子文翰全集一下巻・書簡篇一』(昭

和15年、中央公論社刊)に収録されておりませんので、つぎにその積文を記しておきます。

「昨日は参上、久方振、拝晤、近来になき歓会、難有拝謝仕候。其節承はり候。杏所研究、迂生に於ても心掛可申存候。迂生先年、雪村に付考察致候得共、是は叶はぬ事に存候。御預り候、尊大人詩鈔添画、其内認め可申存候。乍末御令室宜敷清声是願候。草々。四月二十六日。小川芋銭。杉田兩人様、御許。(追伸)尚、甥煙草の事、今後共何分御配慮是願候。」

その芋銭書簡には兩人の厚いもてなしに対するお礼や、江戸後期の水戸の文人画家立原杏所(1785-1840)を研究することの約束や、兩人の父詩狂の「詩鈔」へ添画(挿絵)を描くことの約束などが記されていますが、その中に「迂生(私のこと)先年雪村に付、考察致候得共、是は叶はぬ事に存候」の一文があります。この一文は前述の常陸太田への旅と関係があるのではないかと思います。

この芋銭の書簡から、彼は一時期、雪村について考察を試みたようですが、おそらく史料不足からでしょうか、それを放棄したことが分かります。芋銭の書簡を贈られたころ、雪村研究に行き詰まっ

図2 枯蘆に雪図 雪村筆



図1 芋銭書簡 杉田兩人宛 大正3年4月26日付

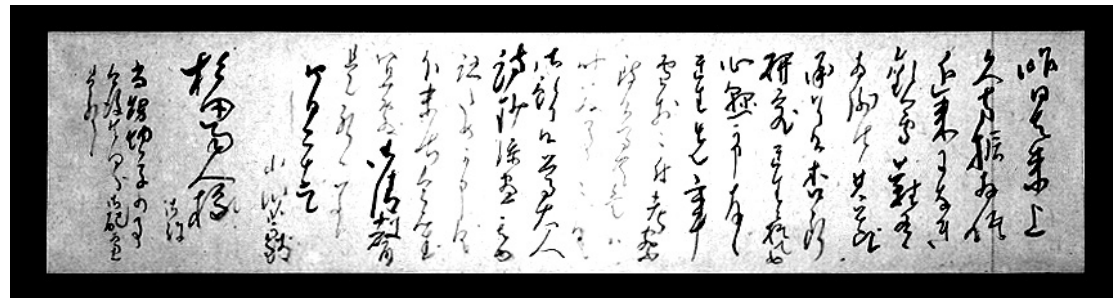




図3 枯柳に白鷺図 雪村筆



図4 梅図 雪村筆

ていた私は、そのことを知って少し気が楽になりました。焦らず、ゆっくりと研究すればよいと思いました。小川さんの皮肉とも励ましともとれるご厚意は本当にありがたいものでした。一方、雪村の研究者でもある小川さんは、この芋銭の書簡をどのように考えておられたのか、一度尋ねてみたいと思っております。

小川さんから『芋銭書簡』をいただいた、しばらくして私は関西在住の古美術蒐集家Y氏のお宅で、新出の雪村画を見せていただきましたが、その出会いは衝撃的でした。「こんな画を雪村が描いていたとは…」と思いました。以後、雪村の見方がそれまでとは違ったものになりました。

この画を収納する桐箱の「口貼り」には、墨で「雪村筆雪笛図」と書かれてありましたが、私はこの作品を「枯蘆に雪図」と名付けました(紙本墨画、36.0×24.5cm。図2)。

その画は、激しい筆致による濃墨の線画の跡を見せ、それが画面全体に掃いた淡墨の滲みと混じり合って、まるで水墨による「抽象画」のようで、はじめは何が描かれているか、さっぱり分かりませんでした。しばらくその画面をながめると、もののかたち、その場の情景がだんだんと見えてきました。

画面右下、太い墨線で白く囲まれたところは、土坡か岩のように見えます。その上の濃墨の勁い筆致の一筆描きは、笹群のようです。

葉の形から推して、熊笹の類かと思われれます。その右の一本の茎のようなものは、鋭い棘のようなものがたくさんあり、葉を落とした茨の茎を表したものです。これは雪村画にしばしば描かれているものです。熊笹の左側の上下に中墨で描いたものは、その先端には淡い墨の暈しがあり、途中で「へ」の字に急に折れ曲がって下に垂れているので、それは枯れた蘆と考えられます。その淡墨の暈しは蘆の穂(蘆の花)でしょうか。枯れ蘆の茎は二本で、上の一本はまだ折れておりません。その背景は水辺の水面と空を表していると考えられます。そして土坡、あるいは岩の内側の白い塗り残しや、枯れ蘆のまわりの白い塗り残しは、「雪」を暗示しています。

そうしますと、この画は雪が積もった枯れ蘆、笹、茨のある荒涼とした冬枯れの水辺を描いたものにちがいがありません。墨色の重い感じから、おそらく夕暮れ時の情景かと推測されます。

「蘆」や「笹」や「茨」は本来、山水花鳥図の名脇役として扱われてきましたが、ここでは画の主役を演じています。中でも「蘆」がもっとも重要なモチーフとなっています。中国には「寒蘆」という詩題がありますが、この作品の発想となったものは、おそらく日本の和歌や連歌で詠まれた「雪折れの枯れ蘆」の伝統からきているように思われます。

画面の右上には「雪村」の款記が

あり、その下に白文方印「周継」の印章が捺されています。よく見ると、その「周継」印の下方、やや離れて蘆の根本の土坡の辺り、笹に隠れるように朱文鼎印「雪村」の印章が捺されています。これは「隠し印章」と言ってもよいものです。それはまた、近世の文人画に使われた「遊印」の風でもあります。室町水墨画家の中で、雪村は「遊印」を多く用いており、特記されます。

この印章は鮮やかな朱色で、荒々しい水墨表現の中で、じつに印象的です。それはあたかも灰の中の「残り火」のようであり、寒寒とした情景の中にわずかな温かさを感じさせます。

ところで、中国の古典所「五経」の一つに、古い書と知られる『易経』(『易』)があります。その哲学的な解釈は中国の思想史を豊かなものにしてきました。この易の書は日本にも古く将来され、宮廷の行事なども易の占いによって決められました。とりわけ雪村が活躍した戦国時代には、戦(いくさ)を行うときは、かならず易の占いをういました。当時、易を識る者は重宝されました。

易の基本は「乾」(けん)から「兌」(だ)までの八つの「卦」(か)で、それを二重に組み合わせた八×八=六十四、つまり六十四卦で全体ができています。そして、この六十四卦で世界の森羅万象とその運命が説明できるとされています。八卦を構成しているのが「陽」と「陰」です。この二種類の組み合わせが、変化を起こして、いろいろなことを象徴すると考えられました。

雪村がこの易の「卦」の意味を込めて画を描いたことについては、拙著『水墨画の巨匠・雪村』(1995年、講談社刊)収所の論文「雪村小伝―その画境の源を追って―」の中で、雪村の代表作で重要文化財、天文二十四年(1555)九月の年記のある景初周随贊「吹々鳥図」を例にあげて詳しく説明しておりますので、興味のある方はお読み下さい。

さて『枯蘆に雪図』は単に冬の景色、景物を描いたものではありません。雪村はその画に何かの意味

を託しているのです。

「雪村」印の「朱色」が前述の「陽」を象徴したものとみますと、この『枯蘆に雪図』は六十四卦のうち「復」卦を隠喩していると考えられます。「復」卦は「一陽来復」(陰が窮まって陽にかえること)のことで、私たちの日常生活でしばしば使われる言葉です。『枯蘆に雪図』はこの「一陽来復」の意味を絵画化したものと考えられます。すなわち「一陽来復」は陽気が再び地中からよみがえってくるというめでたい卦であります。それは「陰中に陽あり」という思想からきています。

この『枯蘆に雪図』は、陰暦十一月の「冬至」のころ、雪の下で根が息づいて、春の芽生え準備をしているという表現と解釈できます。それはまた、悪いことが続いた後に、ようやく好運に向かうことを期待するという意味が込められているのです。

『枯蘆に雪図』と同じ頃に描かれた作品に雪村の『枯柳に白鷺図』(紙本墨画、46.0×44.5cm。図3)がありますが、この画も「一陽来復」の考えに基づいて表現されたものと考えられます。背景から浮かびあがる白鷺の姿には清浄感がたよい、じつに魅力的です。

また『梅図』(紙本墨画、34.5×33.6cm。図4)は、春の陽の中で咲きはじめた白梅の小枝を描いた雪村の小品です。画面の右半分を空間にとる大胆な構図ですが、画面左からちょこっと顔をのぞかせた梅の枝振りにはユーモラスで、人の心を和ませます。雪村の温かな人間性を感じさせる佳品です。

以上紹介しました『枯蘆に雪図』や『枯柳に白鷺図』や『梅図』は大作ではなく、重要文化財の『呂洞賓図』や『雪村自画像』のような代表作ではありませんが、雪村が絵画に託した真意を考える上でとても大切な作品ということが出来ます。

近代の文人画家小川芋銭は雪村の研究を諦めましたが、雪村の画のこころを真に理解した人ではなかったかと、私は思っています。

(林進)